Bulletin of the School of Education,
Nagoya University (Educational Psychology)
1993, Vol. 40, 127 − 140.

青年期危機における「現存在実現」の空間性

―タテとヨコの現象学―

池　田　豊　應

1．はじめに

われわれはこれまでに，登校拒否の本質を青年期危機として捉え，その「時間」的契機に即しては「生成の停滞」と見，また「空間」的契機に関しては「タテ関係とヨコ関係の均衡の崩れ」と考えてきた（池田他，1988，池田，1993，池田他，近刊)。このことはすでに繰り返し述べたところであるので，ここでは立ち入らない。ここでさしあたり，タテ関係とは親や教師，大人との関係，ヨコ関係とは友人や仲間，社会との関係のことであったが，しかし，このタテとヨコの方向性は単に以上のことにとどまらず，もっと深い意味において理解することができる。すなわち人間の発展の方向性の問題としてのそれである。そこで本稿では，登校拒否をはじめ青年期危機一般の存在構造を理解するために，このタテとヨコの空間論について詳しく考察しておくことにしたい。

なお，ここでは「現存在実現」というやや耳慣れない言葉を使った。もっと一般的な「自己実現」という用語のほうが通りはよいが，ここではあとで詳しく述べるように，自己実現は世界実現と区別し，その両者の関係ないしは均衡を問題にしたいので，両者全体を包括する概念として，この「現存在実現」の用語を用いたものである。「現存在」(Dasein) とは，人間が可能性としてはさまざまなあり方がありうるにもかかわらず，少なくとも今，現在はかくかくしかじかであるという人間に特有の存在性格をあらわすハイデガーによる用語であるが，現存在は同時に「世界」としてあり，それは志向的に「将来」にかかわっているから，その個人の実存的展開の方向性をも含みこんでいる。「実現」というのはまさにそのような現存在の「歩み」，展開のことである。「空間性」という場合には，特定の実現の「内容」を限定するものではなく，その方向性だけが主題となる。つまり「現存在実現の空間性」とは，具体的な誰それが現にその生き方において，どのような方向に向かおうとしているのか，あるいは向けられているのかという「意味方向」(Bedeutungsrichtung) の構造を，とくにタテとヨコの関係の視点から見てみようとするものである。

2．「人間学的均衡」

筆者が「タテとヨコの均衡」という問題を考えるようになったのは，「現象学的人間学」で有名な精神医学者，ビンスヴァンガー (Binswanger, L., 1949) の「人間学的均衡」(anthropologische Proportion)という概念によってである。そこでまずこの概念について簡単に紹介することからはじめることにしたい。

「実存の意味方向」としての「上昇」と「落下」に関心を抱いていたビンスヴァンガーは，やがてこの「高さ」という意味方向ともうひとつの「広がり」という意味方向との間の「均衡」を考えるようになった。すなわち，「高さ」とは「自己との関係」における水準であり，「広がり」とは「世界との関係」の幅のことであって，この両者間の比率が問題とされたのであった。ここで，その本質的な意味として，高さには「自己化」「高みへと昇ること」「自己実現」が，広がりには「世界化」「見まわし，見通し，広がりの中へ歩むこと」「内世界的実現」が対応している。ともに人間の志向性の方向であるが，垂直性と水平性とは別の意味を持ち，個々の人間存在においてその自己と世界との統一のあり方が両方向性の「つりあい」として考えられたのである。この際，「世界」とは勿論，自然科学的に還元された実在などではなく，投企と被投性において描き出される実存（脱―自）が根ざしている「現実」，すなわち人間が自分自身を含めてすべての出会ってくるものを会得（理解）している「意味構造」のことである。ビンスヴァンガーが臨床上，もっぱら関心を示したのは，この均衡における水平的拡張を無視して，上下への実現が優勢にされたズレとしての不均衡であった。

そもそも，ビンスヴァンガーが依拠したハイデガー (Heidegger, M., 1926) が人間の根本的存在構造を「世界内存在」と規定した時，日常性において現存在は原本的な自己存在可能である自己自身から脱落して，世

界に「頽落している」(verfallen) と考えた。一般的な「ひと」は世間のうちに埋没している。ところが，精神分裂病圏の人びとは，この意味での世界内存在に失敗しているのである。彼らは世間へと堕落すること，非本来性のうちに落ちていること (Verfahrenheit) のかわりに，「変に昇りすぎている」(versteigen)。これがビンスヴァンガーのいうさきの不均衡としての「現実離れした理想形成」(Verstiegenheit) である。それは，直接にではないけれども表面上の意味としては，「頽落」(Verfallenheit) に対置されうる精神分裂病的現存在のひとつの形式のことであった。要するに，彼らは広がりとのバランスを欠いて上昇しようとしすぎている。それゆえ「地に足が着かない」状態で，「落ちる」不安にとらわれることになる。イメージ的にいえば，何十メートルにも高く伸びきった梯子車のてっぺんにひとり置かれて揺れている状態を想像してみればよい。しかし，ここでは分裂病論ではないので，この Verstiegenheit の問題にはこれ以上，立ち入らないでおこう。ただ，この「人間学的均衡」という考え方，水平と垂直の意味方向について確認しておけば十分である。すなわち，垂直の意味方向とは自己を高める方向であり，動詞でいえば「昇る」(さらに「落ちる」) である。そして水平の意味方向とは世界を広げる方向であり，動詞でいえば「歩く」「行く」「見まわす」「見通す」である。これらの動詞は，ビンスヴァンガーの出発点がそこにあったように夢や夢想などにおいて，あざやかにその深い意味を物語ることがある。

さらに「広がり」への方向に関して何がなのかについて，ハイデガー用語に即して補足しておけば，それはまず環境世界 (Umwelt) との関係としての「(もの) の許にあること」(Seins bei～) であり，それゆえ「配慮」(Besorgen) であり，「帰趨 (Bewandtnis) 全体」である (若干の解説を付しておけば，われわれは普通たとえば机とか椅子とか教室という「もの」を，その存在自体について反省的にいちいち検討したりすることなく，用途に応じて使用するという仕方で，それらのものの「許に」なじんでいる。そういうかかわり方が配慮であり，用途の関連系が帰趨である)。さらにまた，ヨコの広がりは「共同世界」(Mitwelt)，すなわち「他者もまたわれと共に現存在すること」への「関心」(Fürsorge) として，「共にあること」(Mitsein)，「もまたあること」(Auchsein) のあり方をも指示している。広がりとしては，これらの世界についての「経験」の幅が問題となる。経験 (Erfahrung) とは「行く」(fahren)，「歩く」こと，つまり旅，によって獲得された知にほかならず，この水平軸での経験こそが自己存立の基盤となるのである。

3．ブランケンブルクの寄与

ビンスヴァンガーの正統な後継者たるブランケンブルク (Blankenburg, W., 1972) は，この人間学的均衡の概念を高く評価し，これを主題とした「〈人間学的均衡〉概念の原則的諸問題」という論文を著している。この中で彼はこの概念をさらに学問的に洗練するための基礎づけとして，現存在のあり方を理解するために空間的範疇を使用することの可能性とその根拠の指摘をはじめ，さまざまな問題の提起をしているが，ここでのわれわれの関心にとって必要なものをあげておけば，次のようになる。まず，(1) 空間の諸方向は，ビンスヴァンガーの意味で「諸意味方向」としてだけではなくて，同時に人間的実存の発展ないしは「展開」の，つまり現存在の可能性の実現，「開示」の諸方向として理解されうる。(2) 実存の展開方向としては高さだけではなく，「深さ」「深み」もまた重要であり，広がりへの方向には経験の豊富さだけではなく，他者への「伝達可能性」も対置される。(3) この均衡は単に静的なものというだけではなく，動的なものとして捉えられなければならない。すなわち，高みへの発展と広がりへの展開を同時に実現することは困難である。それにもかかわらず，両者は相互排除的ではなく，むしろ相互依拠的なのであり，互いに拮抗しているものの関係という「緊張ある調和」としてその都度の統一があらわれてくる。つまり，弁証法的力動的関係が問題なのである。(4) この概念の精密化のためには，均衡がよくとれているのかどうかという評価の側面にとらわれず，ある世界内存在の現存在体制，現存在様式，現存在空間および時熟を，いいかえれば個体性という受肉構造をきわだたせる諸均衡を取り出し，特徴づけることが肝要である。(5) それゆえこの概念は，現存在が空間的なあり方をすることだけにはとどまらず，もっと広範な応用が可能なのではないか。

この(5)から，よく知られた「自明性」の問題が取り出される (ブランケンブルク，1971)。この自明性，つまり「おのずから明らかであること」の「おのずから」は，これと拮抗的弁証法的関係にある「自」のもうひとつの側面，「みずから」すなわち「自主性」と対応している。(5) の指摘にもかかわらず，これをやはり空間の範疇に投影すれば，「みずから」「自主性」は垂直軸に，「おのずから」「自明性」は水平軸に位置づけられると思われる。「おのずからしかり」としての「自然」はやはり水平的であるから，「自然な」「自明性」はともに水平方向を意味していることになる。

4．上下の意味方向

さきの(2)の「深さ」の指摘に関していえば，「深い洞察」「深い愛情」「深遠な文学，芸術」などという場合のように，たしかにこれも人間の展開の方向性として考えられるが，これはさしあたり「下へ」の方向であるから，一応は垂直軸上に位置づけることができる。この「下へ」の方向性に関連して，クーン（Kuhn, R., 1972）もまた「ビンスヴァンガーの業績の今日的意義」という論文の中で「ヴィルシュはかつてビンスヴァンガーに，一体，ファウストが母親たちの国へと向かった歩みはどんなであったのか，と尋ねたことがあった。ビンスヴァンガーは単に深淵への落下だけではなく，下への（積極的な）歩み（Hinunterschreiten）ということもあることをよく知ってはいたけれども，この問題が追求されることはなかった」と述べている。ここでは下方への積極的な歩みという動きと，その意味方向としての「母なるもの」があるということを確認しておこう。

わが国の代表的な臨床心理学者のひとりである村瀬孝雄（1983）は，「イニシエーションと夢」という文脈で「大人になるということは，母の庇護を離れ，母への忠誠を放棄して父なる社会に忠誠を誓うことである。主観的内面的な視点からみると，この独立の過程は無意識の世界でいったん母のもとに回帰して，もろもろの経験を経た後，再び父の世界へ向かうための数々の試練を克服して，新たに生まれかわることを意味している」という。同じ垂直軸でも下方が母なるものであるならば，上方は父なるものということができる。したがって，この大人になろうとする青年期という時期は，前節で述べたタテからヨコへの発達の間にあるだけではなく，タテ内部においても父なる上への方向と母なる下への方向の間に，すなわち危機に，もあることになる。

しかしこのことは，単に上か下かの間で引き裂かれるとか，下から上への一方向上の中間にあるという静的状態としてではなく，ブランケンブルクのいう弁証法的力動的関係として，すなわち高くに昇ろうとすれば深くに降りねばならず，この否定によってさらに一段高められるということとして理解しなければならない。

そしてこのことにも関連して，現存在実現の深さへの方向というものはやや特殊な性格づけを帯びているように思われる。たとえば「深い洞察」「深い疑惑」「深い信頼」などのように，質として形容される場合には「深い」であっても，これらの名詞に「〜性」をつけて程度を表そうとすれば，形容詞は直ちに「高い」となる。すなわち「深さ」は「高さ」の方向を折り返した，もうひとつの「水準」であることがわかる。この意味での深さは本質的には高さに他ならない。また「深い森」「深い味わい」「深窓」のように，上下軸というよりは奥行きの厚さを表す奥深いという方向もあるが，こうなるとかなりヨコ軸的なニュアンスが強くなる。

同じ「深い」でも以上に述べたものとは違って，「深い淵」など純粋に下方のみを指す場合もある。というより，このほうがむしろ第一義的なのであるが，ここで下方一般が指し示す実存的意味について考えるために，まず逆の上への方向の意味に関してまとめておくほうがよいであろう。垂直軸は「自己」の軸であり，上方は「自主性」「みずから」の方向であったから，これは要するに「自己確立」「自己獲得」の方向である。したがって，自立，独立，確立，獲得，努力，理想，目標，夢，意識，精神等々，自己の個別性，同一性を確保しその水準を高める意味方向がこれに属している。また，上は「軽く」「上がる」方向であるから，気分性についていえば，喜び，楽しさ，嬉しさなど主に快的感情はこの方向性にある。

下方はこの逆方向であるから，「自己解消」「自己放棄」ないしは「自己脱却」「自己喪失」等を意味することになる。この自己喪失は普通の意味で自分を見失うということではなくて，「純粋経験」のような真正な経験自体においては自分がそれを経験しているとか観察しているという自己意識はなく，対象それ自体の経験のみがあるが，そこにおいてもっともリアルに自己も経験されているというような場合の自己のない状態のことである。こうして自己を忘れていることができることによって，真に対象とかかわることができ，自己を確立することもできる。したがって，没頭とか埋没，あるいは自意識からの脱却，無意識，眠り，意識喪失等々，自己の個別性や同一性確立への努力から解放される方向である。くりかえすが，それがまた上への方向を可能にする根拠となっている。

自主的であることの逆は「ひとりでに」「自動的に」「受動的に」「向こうからやってくること」である。さきに自明性は水平軸に位置づけたが，この「おのずから」をこの関連で「受動性」に重点をおいて見れば，これは明らかに下方向である。したがって，運命，宿命，被投性，身体，その他もろもろの「所与」はこの下方にくる。「激情（パッション）」は「受動（パッション）」であるから，気分性一般というものがそうであるが，とくに「重く」「沈む」「とらわれる」「引き込まれる」「落ち込む」方向が相当し，憂い，悲しみ，苦悩，不安，憂鬱等の不快感情は下に向けられている。病，受苦，死もまた「受動」である。以上の両方向性をかつて筆者（1977）は「出立」と「還帰」として捉え，両方向の相即的展開としての「自己」について

検討したことがあるが，簡単には上下方向はこの出立と還帰の方向といいかえてもよい。勿論，両者は自己の両面としてダイナミックな関係にある。

以上は個別的自己性の範囲内での意味性であった。しかし，さらにそれを超えた上方や下方の意味についても考えることができる。個別的自己を超えた上方とは，大宇宙，天や神，また天国や神々であり，禅の意味での空や無，大なる意志，大なる自己である。またそのような下方とは，根源，根拠であり，死，解体，腐敗等一般のいわゆる「アンチエイドス」であり，虚無，空虚，黄泉の国，生命や死をも生み，また呑み込む根源的生命性，大宇宙的意志，根源的自発性である。この個別性を超えた方向は，したがってもはや空間性をも超えるので，両方向は結局のところは同じものを指すことになる。われわれがそこから来たり，またそこに還っていく大宇宙の原理としての根源的自発性，ここからわれわれの個別的生はその都度の「生の躍動」を与えられていると考えることができる。いいかえれば，みずから頑張って自分が生きているという能動性は，おのずから「向こうからくるもの」としての受動性によって「生かされている」ことに基礎づけられているのである。

5．平面の意味方向

次には，水平軸の意味方向について検討しておこう。ここで，バウム・テストのひとつの基本的解釈仮説となっている「空間図式」（Koch, C.，林他訳，1952）を思いおこしてみると，ここにおいては上下，左右の軸を組み合わせて八つの方向性が取り出されている。ただし問題となるのは，ここでは左右が基本的に時間軸とされている点である。たしかに時間を二次元空間で表現する時には左―右が「過去―未来」を表し，発展の方向は右に向けて示しうるけれども，それは主体と切り離して対象化された一定の枠内での空間についていえるものであって，その中で主体が動き回っている生活空間における左―右がいつも即，過去―未来なのではない。舞台空間では時の流れは基本的に左（上手）から右（下手）への動きとして示されるが，奈落から「上がってくる」ものとして始まり，「下がっていく」ものとして終わることもある。映画になれば「はるか前方から来る」ものとして始まり，「はるか彼方へ行く」ものとして終わりうる。すなわち「奥」が過去であり，また未来である。自分が向く時には，前が未来であり，後ろが過去である。そもそも「前後」は時間にかかわる重要な概念なのでもあった。バウム・テストの解釈仮説になる空間図式を「箱庭作品」のような三次元空間に適用しようとすると，時に困難となることがあるのは以上の理由によると思われる。つまり，箱庭の「奥―手前」が即「上方―下方」，「左―右」が即「過去―未来」の意味を持つとは限らないからである。

勿論，時間と空間は本来そう簡単に峻別できるものではないけれども，「空間図式」というからには，まずは時間的要因を持ち込まないようにして，できるだけ純粋に空間範疇の枠内だけで諸方向の意味について検討する必要があろう。時間は，これら空間的諸方向の「純粋持続」的展開における脱自的連続態としてまったく別の範疇において，たとえばわれわれが「停滞」と考えたように，図式化するにしても空間図式とは別の空間化として，捉えるのがよいと思われる。しかし，このようにしてさきの「空間図式」から時間的要因を取り除くと，とたんに色褪せたごく常識的なものになってしまうのがわかる。垂直軸において残るのは，「上へ」の方向が意味する「精神性」「意識」とそれに属する「努力」「願望」であり，「下へ」の方向は「物質性」「下意識・無意識」とそれに属する「退行」「退廃」「敗北」である。水平軸では左右の意味の相違はほとんど失われ，せいぜいこの軸が「内向―外向」「内省―行為」のように行動の次元にかかわるものだということが示唆されるだけである。

これは考えてみれば当然でもあって，まず空間図式というのは基本的に身体図式に対応しているが，地上を前後，左右に移動することは人間にとってごく自然な運動である。これに対して垂直に高く登るとか深く潜るという運動は，道具を用いなければそう容易にできることではない。地平の方向は人間にとってより自然な日常的，親和的空間であるが，垂直の方向はより違和的である。このことはすでに知覚の基礎的心理学において確かめられているところである。たとえば，平地における十メートル先は何でもない距離であるが，十メートルの直下を覗けば相当怖いし，同じ直上は圧倒的である。上下の空間方向は人間にとってより特殊な空間であるため，誰にとってもかなり限定された，いわば絶対的な意味を持つことになる。人間ははるか昔に，直立姿勢を取ることができるようになってはじめて人間らしくなることができた。しかし，この姿勢を保つには常に努力を要するから，休む時，眠る時には横にならなければならない。ここからこのような上下の持つ一定の意味が，かなりの普遍性を備えたものとして現れてくると考えられる。それに比べれば，前後左右は主体に応じて相対的であるから，生活空間では大した共通の一般的意味を持つわけではない。東西南北でさえ，見知らぬ場所で太陽が出てなければ，やがては定位しにくくなる。禅では「いずこにぞ南北ありや」という。

もっとも，この禅語は当然，反語の意味であるから，

逆にいえば，いかに人間の生活一般において，東西南北が自分の定位にとって重要であったのかがわかる。そもそも定位（orientation）とは東を知ることであった。太陽の出る方角であるが，人間やその住居は太陽に向かう性質があるので，人間にとっての「正面」は南である。正面を向いて左が太陽の出る東であり，一日の始めである。右は西であり，一日の終わりであるから，時間の流れが左から右へと向かうのは理由のあることである。したがって，左が過去，右が未来となる。しかし，それはさきにも述べたように，対象化された枠内での記号論的意味の場合であって，左右一般の意味としては多様である。

6．生活空間の人間学

上下が比較的単一的な意味を持つのに対して，左右，前後の広がりははるかに多彩で多様であった。前進，後退，前向き，後向きなどはかなり一般的な比喩性を持つが，左右の象徴的意味はかなり文化的に規定されたものであることも多い。それゆえこれらの諸方向性に普遍的な意味を見いだそうとするより，ここでは少し視点を変えてみる必要がありそうである。水平方向の基本的動詞は「歩く」であった。しかし，それはどこからどこへとそうするのであろうか。

独語圏における「人間学」の伝統は，この点を考える上で有効な鍵となる「住まい」「住まうこと」(Wohnung) という概念を持っている。ハイデガーの「世界内存在」における「内」ということもこの「住みつく」「宿る」の意味であった。ここではボルノウ（1969）の考え方を参照してみよう。長くはなるが，本論にとっては非常に示唆的であるので，彼の「空間の人間学」についての要約を次に示したいと思う。

人間の空間においてはどの地点も同じ価値を持つのではなく，特別な中心点があって，すべてがそこに関係づけられている。それはその者にとっての世界の中心点である。人がその時々にいる偶然的な地点のほかに，そこに属している永続的な場所があり，そこから出発してまたそこに戻る場所がある。そこが住むところであり「家」としての場所である。この家は人間の「庇護される空間」である。それは閉ざされた，安心できる，親しみのある，不変の，居心地のよい，独特の雰囲気を持った，和やかな場である。この家という空間の基本形式によって無限の空間から隔てられた狭い領域が区切られ，「外界」と「内界」の区別が生まれる。外界は人間が仲間や友人や敵との共同社会の中で仕事をしなければならない広い世界であり，内界はそこから戻って休み，生活の苦労から自分を取り戻す狭い空間である。このような保護された空間の中で外界からの侵入や妨害や脅威から隔てられ，家族と平和で安全に暮らすことができ，外界の「世の嵐」からそこに帰って疲れを癒すことができる時にのみ，人間は健康を保つことができる。とくに成長期にはこのような生活の安全さが庇護されなければならない。こうした「親しみの空間」「親密な領域」「秘密の場所」に住むことが「世界への信頼」「存在の信頼」の根拠となるからである。

人間はこの住まいの空間に対して整理し，一定の「秩序」(Ordnung) を保つという形式で関係するが，それは空間を超えて世界，および自己を整理し，秩序を創り保つということの基礎としての重大な意味を持っている。

しかし，人はまたこのような個人的な空間から出て，別の開かれた公共の外の世界にも入っていかなければならない。それは社会という開かれた「共同の秩序空間」であり，目的に即した種々の活動を伴う，他者との相互の「かけひき」の場としての，本来の意味で「政治的な」，力による戦いの，取り引きの世界である。ここでは家族の中での調和的な生活とはまったく違った形で，仲間が立ち現れてくる。まず，彼らは敵としてライバルとして対立してくるので，この戦いの世界で自己主張しようとすれば，全力を傾注せねばならず，たえず注意を怠らずに甘い言葉から身を守らねばならず，不信の気持を抱いていなければならない。人は自分の取り引きの成果を確実に計算することはできないから，戦いの危険を引き受けねばならず，成功したいのなら自分を賭けなくてはならない。それゆえ，この世界に入っていくためには，まず「勇気」を必要とするのである。

勿論，他人はつねに敵とは限らない。この脅かす危険な世界の中での結合，仲間との友情，グループでの結びつきというものもある。それは同じ階層の，普通は同じ年代の，同性の結びつきであり，西欧の文化の中では主として男たちの世界のことである。ここでは快適で暖かい家の雰囲気に対して，世の中の共同の敵を克服するための理想主義的特徴が発達する。すでに子どもの時から，彼らが家から通りへ出るとすぐ，連帯を求める傾向があることをわれわれは知っている。これは決して家族の中で満たされなかった人間的暖かさへの埋め合わせなのではなく，外部世界に滞在するのに適応するための本質的に別の生活形式なのであり，家族との生活にも補われなければならないものである。そこでは職業にまつわる獲得や所有への努力の他に，仲間の中での名誉と威信への欲求，一般的にいって政治的なもののより自由で偉大な諸特性が要求される。それゆえ，ここでは勇気のみならず，責任を引き受け，躊躇することなく，自分の

力を惜まず共同の事柄に自分を投入する覚悟が必要となる。

しかし，この公共の空間の彼方に，定かには境界をつけがたいけれども，もう一つの新しい空間が開けている。すなわち，あらがいがたい力で人の心を引きつける未知の領域，遠い諸国，無限の広い世界である。これも人間空間の構成要素の一つであり，この要求を満たすことも必要である。ここにまた人間のまったく別な態度と美徳が表れる。無限な拡がりの空間に進み出る大胆さ，自分の力に対する喜ばしい確信と信頼とである。政治的な自己投入が人間の負うべき重い責任によって決定されたとすれば，ここでは日常の軌道から外れることが喜びとなる。これは冒険の喜びであり，未知の世界で予測できない事件に遭遇することへの喜びである。これがなければ生活は息苦しい快適さの中に萎縮してしまう。成長する男児がどれほど樹に登ったり知らない洞窟に侵入したがるものか。これは空間を支配したい自然な要求の表れであり，子どもを誤った心配から引き止めてはならず，むしろ手助けしてまだためらっている子どもたちを勇気づけねばならない。

また「跳躍」には特別の意味がある。人は跳躍において安全な地面から離れ，自由な空間に身を委ねるからである。こうして跳躍は人生における決定的な新しい冒険の象徴的な前ぶれとなる。自由な大空のもとをさすらったり，とくに野宿したりすることも別の形で同じ意味を持つ。人は住みついた日常の習慣から抜け出して予測できない偶然に身を委ね，それによって無限の空間に対するまったく新しい親頼感を得るということも大切である。しかしこのことは，不動の家の中に根を下ろすことの必然性を否定するものではない。広い世界で自分の仕事をした後に，また自分の家の平和に帰っていって，そこで新たな力を補充できるものだけが，おそらく広い世界の中に住むことができるのである。

以上のように，同心円的に描きうる，家の庇護してくれる狭い領域，公共の広い空間，さらに無限に拡がる遠くの世界が同じように人間の生活に属しているが，これらがひとつになってはじめて人間生活は十分な可能性を展開することができる。「その際，これらが正しいつりあいを取らねばならない」とボルノウは強調する。ここでもまた，つまり水平軸においても，それ自体における「均衡」が重要なのである。

ボルノウの語り口は「家」における「親しんでいること」，「見知らぬ世界への冒険」など，相当具体的ではあるが，これは当然，事実的な建物の問題などのことではなく，きわめて比喩的な，心理的，抽象的なことがらの意味に理解しなければならない。したがってこの空間における展開は，生活史的な，すなわち過去から将来への事実的に時間的な，発展の問題なのではなく，勿論，そこに不可欠の基礎を置いてはいるけれども，むしろこの「今」における存在論的構造としてのものなのであり，それゆえに均衡が問題になりうるわけである。すなわち，庇護された安心できる家への住みつきのありようが，その時々の共同世界や見知らぬ世界への住みつきの仕方を基礎づけているのであるが，それがまた狭い世界への住みつきのあり方を基礎づけ，深めるのである。もし単にこの展開が歴史的，事実的にだけ決定されるのであれば，その均衡を取り損ねた者に対して教育的，ないしは治療的な働きかけを行う余地はまったく残されていないことになってしまう。

ボルノウの公式化においては上下的意味も若干含まれているが，ここでさきに見てきた上下の「自己」の軸もあわせて考えておくと，彼のいう「庇護された親しい空間」，第二次集団へと歩み出す勇気とそこでの自己確立，および無限の遠い世界への冒険，の均衡という存在論的構造は明らかにビンスヴァンガーの「高さと広がりの均衡」，およびブランケンブルクの「自主性と自明性の均衡」という考え方と相似している。また「幼児期における基本的信頼と青年期における同一性の関係」の問題などに現れているように，エリクソンも実はこうした独語圏の人間学の伝統の系譜に繋がるものであることがわかる。

エリクソンにおいては，「基本的信頼」が生み出す「生命力」（vatue）とは「希望」であった。希望とは「将来」への肯定的な期待であるから，こうしてここでは主題としなかったもうひとつの重要な範疇，「時間」の問題にまた突き当たる。青年期危機の「停滞」「止まる」というあり方をさらに深く検討するために，「時間の人間学」の視点を整理しておくことはきわめて魅力的な課題であるが，ここでは立ち入ることができない。

7．現存在実現の空間モデル

これまでは主に垂直軸と地平ないしは水平軸という言葉を使ってきたが，ここからは主にタテとヨコという用語にすることにしたい。タテ，ヨコは日本語にかなり特有な言葉であり，西欧語ではこれに直接ぴったりと対応する用語はないため，西欧の人間学の範囲内では垂直と地平といういい方しかなかったのである。とくにタテという概念が周延する範囲はこれに相当する西欧語よりは格段に広い。まず西欧語の垂直はどちらかといえば，まさに錘を垂らす方向として主に下方が含意されているのに対して，タテは明らかに「立つ」「立てる」と関連し

ているから上への方向に重点がある。しかし，タテは上下ばかりでなく，人が「縦に並ぶ」のように平面における前後のことであり，方角では南北のことである。長短のあるものでは単に長いほうのことをいう（たとえば「日本縦断」）し，「縦断的」といえば時間経過のことをさす（中国語では縦の字は，もっぱらこの時間的な流れのことを指し，ここでいうタテは竪の字で示す）。要するに，この言葉にはかなり日本語的性格が反映していて，その時々の，あるいは本来の主体との関係に対応して非常に柔軟に用いられているが，その都度の脈絡で意味は決まってくる。

ヨコは「左右の方向，そば，傍ら，側面」の意味であるから，西欧語の水平，地平よりはスケールはずっと小さい。さきのボルノウの無限の遠い広がりというような概念を当てはめる軸としては必ずしも適切とはいえないようにも見えるが，タテもヨコも人間の生活空間に密着した言葉であるから，空間の心理学的構造を考えるためにはふさわしいと思われる。「縦横に」といえば「自由自在に」の意であるし，漢字の縦も横もともに「ほしいままにする」を意味するので，人間の態度や志向性とかかわっており，この点でも人間の可能性の実現，展開の空間的構造の規準軸としては垂直と水平と呼ぶよりはよいのではないだろうか。

こうして，われわれは人間的現存在の空間的存在様式を検討するために，タテとヨコの二軸を手に入れた。タテは「自己性」の軸であり，ヨコは「世界性」ないしは「社会性」の軸である。タテの上方は自己の実現，出立，確立の方向であり，下方は自己の解消，還帰，解放の方向である。その非常に大まかな程度の規準としては，上に向けての「低さ」「高さ」「無限が」，下に向けての「浅さ」「深さ」「無限」が設定されうる。ヨコは世界の実現にかかわり，左右を問わず「狭さ」「広さ」「無限」が規準とされうる。

それゆえ，それぞれの方向が指し示すものとして，次のようなものがあげられる。

［意味方向の主題一覧］

タテ　上方：自己確立，個別化，自立，独立，目的，目標，先駆，先取り，こだわり，大人，成熟，自主性，個性，能動性，合理性，理想，空想，計画，創造性，独創性，投企，賭け，決意，決断，勝利，冒険，勇気，頑張り，未来，希望，努力，達成，評価，志，希望，願望，夢，歓喜，昼，真理，精神，意識，論理，言葉，英知，神，絶対性，命令，当為，使命，父性，天国，光，宇宙，悟り，空，無，超越，無限……

タテ　下方：自己放棄，非個別化，自己喪失，被投性，被決定性，従属，宿命，遺伝，血，家霊，没頭，忘却，埋没，とらわれ，意識喪失，自己脱却，堕落，退廃，頽落，退行，敗北，休息，解放，無為，こころ，安らぎ，くつろぎ，安楽，睡眠，夢，無意識，イメージ，非合理性，衝動，混沌，混交，酩酊，狂気，過去，所与，受動性，物質，身体，性別，母性，母胎，夜，地下，地中，黄泉，冥途，地獄，暗闇，根，根源，根拠，悩み，苦悩，不安，恐怖，絶望，深淵，死，屍，病，腐敗，空虚，根源的自発性，根源的生命性，超越，無限……

ヨコ：他者，周囲，日常性，生活，世俗，庇護，配慮，環境，現実，関心，関係，秩序，整理，道具，ウチ，ソト，家，家族，隣人，友人，仲間，異性，友情，恋愛，親密，信頼，不信，かけひき，取り引き，力関係，政治，人々，世間，社会，大地，視野，経験，旅，苦労，職業，職場，学校，仕事，労働，勤勉，重荷，義務，責任，契約，約束，規範，知識，所有，趣味，もの，交流，合意，相対性，伝達，共感，共通感覚，常識，自明性，自然，地域，共同体，協力，連帯，競争，対立，対決，敵対，勝負，闘争，暴力，遠ざけ，戦い，愛，出会い，結婚，合体，永遠，超越，無限……

まだ他にもいろいろありうるであろうが，ざっと思いつくものを羅列してみれば，以上のようになる。さきに用いた「自己性」，および「世界性」ないしは「社会性」という用語の具体的諸内実はこのようなものである。ただし，これらは一応，主要と考えられる位置づけなのであって，これら指し示されているもののすべてが，いつもこの意味方向のもとに固定的に分類されるわけではない。指し示されている名詞自体が必ずしもいつも固定された方向性を有しているのではなく，それをその都度，指し示すものとの関係，結果によって決まってくるのである。上もヨコも「実現」の方向であるから，とくに達成・獲得にかかわるものはそれ自体の意味によるよりも，その時々の文脈によってタテにもヨコにも位置づけられうる。たとえば，責任や義務はそういう形式自体としてはヨコであるが，その内容についていえばタテ，つまり重い，軽いがいいうるし，規則，規範なども相互の合意により取り決めたものであればヨコであるが，絶対的に従うべく与えられたものならばタテである。冒険も遠くへ出かけるという点ではヨコであるが，それに踏切り賭けるという点ではタテである。家族としての両親はヨコであるが，父性，母性となれば上と下になる。その大まかな程度としての位置が二軸の交点に近ずくほど，たとえば「安らぐ，くつろぐ」等，両方向性は曖昧なものとなる。とくに「身体」は特別な性格を持つ。ここでは物質性の意味で下方に位置づけたが，それはヨコに歩

む主体でもあるから，両方向性の交点あたりに置かれるべきものである。この点，身体こそ自己の原点に他ならないのである。

あるいはもっと基本的な問題としては，たとえば世間的なつきあいとか勤勉とか労働にしても経験にしても，それらヨコの方向での実現は，結局のところは「自分が生きるために」であるから，自己実現，つまりタテの方向に収斂することになる。それゆえ，これらの指し示されているものは，さしあたりその都度の現存在実現への志向性がそれらの主題に関して主にどちらを向いているのかという点で区別された位置づけなのだということである。

それぞれの方向で指し示されているものはさまざまな領域にわたって種々多様であり，それら自身における直接の関係はほとんどないようなものでも同じ種類としてまとめられるのは，いうまでもなく意味方向という空間的規準を導入したことによっている。この規準は単に具体的，物理的な空間的位置方向を表示するのみではなく，気分や人格や道徳性や社会的位置や評価や人間の経験の展開，可能性の実現，その他さまざまなそれ自体は本来空間性を持っているのではない領域のものをも，比喩的に，しかも間主観的に，ひとつにまとめるという普遍性を有している。この時，方向を指し示すものがその方向を指示しているのは，主に「高い」「低い」「狭い」「遠い」「舞い上がる」「沈む」「昇りつめる」「転落する」等の「述語」である。意味方向として指し示されている「何」，つまり主語となりうる名詞よりも述語が「共通感覚」の担い手として主語の多様な領域を超える比喩，転用を可能にする媒介者となっているのであり，指し示される名詞はいわば「述語論理」によってグループ化されているわけである。これまでも時々「昇る」「歩く」「高い」「深い」などの動詞や形容詞に言及してきたのはこのゆえにであった。そこで次に，より直接に意味方向を物語る述語についてまとめておこう。これはさきの主題内容に比べれば，はるかに少なくなる。

［主題を方向づける述語］

タテ：高い，低い，浅い，深い，昇る，登る，上がる，立つ，伸びる，飛ぶ，跳ぶ，翔ぶ，下りる，降りる，根をおろす，安らぐ，眠る，墜ちる，落ちる，落ち込む，沈む，とらわれる，とりこまれる，引きこまれる……

ヨコ：狭い，広い，近い，遠い，歩く，行く，出る，帰る，経験する，知る，学ぶ，住まう，持つ，所有する，使う，働く，担う，共にある，もまたある，戦う，対立する，勝つ，負ける，逃げる，協力する，競争する，親しむ，信ずる，の許にある，愛する，横たわる，庇護される，引きこもる，隠れる……

以上の二軸により直交座標系が構成されるが，この座標における現存在の位置は決して静的，固定的なものとして捉えられてはならない。たしかに，人はその瞬間においては，この座標上の一点にしか位置づけられえない。高くや深くにいる時，同時に広くいるわけにはいかない。たとえば，高邁な思索に集中しながら，同時に日常的満足や人のための尽力に関心をはらうことはできない。しかし，高く，深くあろうとすれば，それだけの基盤が必要である。その高みにある瞬間には，ヨコ方向での日常生活や共同世界への配慮は安心して忘れていられるほどには，すでに大地の上での住みつきが確固としたものになっていなければならないし，その高度な水準への努力自体，幅広い伝達可能性を視野に入れたものでなければ，ただの「ひとりよがり」になってしまう。ヨコへの広がりを無視した単なる上へのしがみつきが，ビンスヴァンガーのいう Verstiegenheit であった。ここに，タテとヨコとの「均衡」の問題が主題化してくるが，このことにはブランケンブルクが自己の超越論的構成を自主性と自明性の相互依拠的・相互否定的な弁証法的関係として捉えたのと同じ事情が対応している。すなわち，自主性はその成立の根拠，立脚点を自明性のうちに有しながらも，その自明性を否定し，それが破れてはじめて自主的であることが成立する。逆もその通りである。そのような正・反・合，ないしは定立・否定・止揚の絶えざる連続的展開として人間的生成は存在する。したがって，現存在の空間座標における定位は，点ではなくて，ダイナミックな動きを表す連続曲線が何度もくりかえして描く軌跡によって，主に囲いこまれる領域として示されることになる。

同じ軸上においても，同じことがいえる。つまり，その都度の位置はその都度，相互排除的であって，高くいる時，同時に低く，浅くいる時に深く，狭くいる時に広く，近くいる時に遠くに，いることは当然できない。にもかかわらず，筆者が自己成立を「出立と帰還の相即状態」として示したように，あるいはボルノウが「不動の家の中に根を下ろすことのできるものだけが広い世界の中に住みうる」のだというように，両者はやはり相互補償的関係にある。その時々の一瞬における位置は一点であっても，一定の幅を持った時間内での連続的運動と見れば，たとえば原子における電子の動きのように，絶えざる流動の軌跡としてそれが包括する範囲を描きうる。そこに「緊張ある調和」としての均衡性が成立している。

この座標において，ヨコ軸はボルノウによっては大ま

かな規準が狭さ，広さ，無限の三層からなる同心円として考えられていたが，それに対応してタテの軸もまた低さと浅さ，高さと深さ，無限という三層の同心円と考えれば，前後の軸を加えて三次元の立体的な球型のモデルを設定することもできる。とはいえ，上も下もヨコも無限の方向性としては同じものに繋がるから，実はもはやユークリッド空間を超えることになるけれども，さしあたっての生活空間としてはそれでよいとしておくことができよう。しかし，三次元のモデルでは複雑な割に得られるものはそれほど多いとは思われないので，ここでは以下，球ではなく，単純にタテとヨコの二軸による座標モデルとして考えておくことにしたい。つまり，前後左右は交替可能であったから，球はタテ軸を中心にヨコ軸を回転したものであり，ヨコを面にしなくても，ヨコ軸一本で面を代表しうるのである。

なお，今のところ規準はきわめて大雑把であるけれども，このモデルにおけるその都度の運動の軌跡，均衡として個々人の現存在実現の様式を数量化し測定することも可能であるかもしれない。

このモデルについては，以上のところでまだほんの基礎づけを行ったにすぎない。したがって，このモデルを学問的に一層，洗練していくためには，そのような数量化可能性の問題の他にも，発達論的検討との関連やさらに現象学的，および人間学的視点での精密化やその他の応用可能性についての検討が残されているが，ここでは以上で留めておくことにしたい。

8．このモデルにおける青年期危機の位置づけ

こうして，われわれは人間の現存在実現にかかわる空間モデルを手中にした。これはあらゆる人のその時々のあり方を位置づけることのできる枠組である。したがって，これはまたさまざまに多様な方面にわたって応用可能な人間理解のための視点であるということができる。

理想的な人間実現の可能性としては，タテ，ヨコ両次元の各方向に十分に延長展開し，それこそ「縦横に，自由自在に」流動しながら，バランスの取れたあり方をすることである。その際，どの方向も重要であり，不可欠であるということを強調しておかなければならない。上方への方向性が大事なことはわかるとしても，下方の，安らぎや自意識からの解放等の「還帰」的内容だけではなく，不安や混乱，死，病，解体，空虚等々の単にネガティヴとしか見えないものもそうであろうか。その通りなのである。死を含み込まずして，真の生はない。「自己の同一性はその断絶を通じてしか獲得されえない。同一性は非同一性に深く基礎づけられている。連続は非連続を根拠としてのみ可能である」（木村，1986）。（ただ，そのような単にネガティヴに見えるいわゆる「アンチエイドス」は，それが他の方向性との均衡によってアウフヘーベンされてはじめて「アンチテーゼ」としての意味を獲得するのであり，それが決定的にテーゼを圧倒し尽くして終わるならば，現存在はそれに引きわたされ，それにとらわれて，不均衡な弁証法的流動の停滞した状態に落ち込むことになる。ちなみに，エリクソンの「危機」概念，たとえば「信頼対不信」「同一性対同一性拡散」等の「対」で彼が真にいわんとしたことは，ここでいうこのような弁証法的展開の意味として読み取らねばならない。）また，ヨコの方向に関しても，社会的関係の諸領域にわたって，信頼，親しさ，連帯，共感，「の許にあること」「共にあること」「やはりまたあること」といった「親和的系列」，競争，対決，かけひき，勝負といった「対立的系列」と，および約束，契約，合意といった「相対的系列」の意味内容が指し示されているが，発達的にはおそらくこの順序で体験され，統合されていくものであろう。ここにもやはり弁証法的関係が認められる。すなわち，親和的経験の系列が存在論的基礎となって，より高度なはるかに遠い世界への信頼へと止揚されるという循環的発展がなされていくと考えられる。そして，それはそのままタテの自己確立の発展に対応している。それゆえ，そのどの系列も重要である。どの方向も十全な現存在発展の契機として不可欠なのである。

この座標にプロットされるのは，現存在実現に向けての絶えざる流動の軌跡であった。それは，「自主性と自明性」「狭い親しい世界と無限の広がりの中に住まうこと」の関係のように，その都度の位置，つまりその時々に当のそれであるということが，同軸上または別の軸上のそれに対応する相手のうちに自らの成立の基礎を有していながら，その相手を否定（Privation，奪取）することによって，それ自身になりえているという弁証法的展開としての運動の軌跡である。このような弁証法的運動，時間的流動が硬直化し，著しい不均衡に陥っている例としては，すでに述べたビンスヴァンガーのVerstiegenheit，およびハイデガーのVerfallenheitがあげられる。前者はタテ軸の高いところにのみ狭いタテ型の楕円として位置づけられるし，後者は上下の幅が薄くヨコ軸上にのみ広がった細い長円として位置づけることができる。これはまた一般的にいって，前者が分裂病的存在様式と，後者はそう鬱病的存在様式と対応している。青春期痩せ症は，女性という性を有する肉体にとらわれ，それを拒否して，精神のみの存在たろうとする不可能な理想に縛られているという点で，やはり狭い範囲で上下に引き裂かれているし，対人恐怖症は，自分の赤面や表情，目つき，顔や体つき，体臭等々の身体性に

こだわり，その理由でヨコ軸での「人まえ」という「中間領域」を意識しそこから退避するという点で，比較的浅い下方と少し広がったヨコを通る円を描くと同時に，自己の身体性は本来そうであるべきではないという理想を持つ点，「中間領域」より広い世界での職場や学校での社会生活は一応送りうるという点で，ある程度の高さとかなり広いヨコを通る円をも描くという二重の軌跡によって示されることになる。

9．登校拒否のあり方

危機一般は時間的生成の断絶，停滞と考えられるから，モデル上の位置は流動的運動の停止した，したがって右にも左にも，上にも下にもどこにも行けない，動きの取れない状態として，原点を中心に狭く低く浅いところに描かれる小さな円で示されうる。登校拒否の場合もこの点では同じである。そうではあるが，次の点で基本的にはさきの青年期危機一般の位置と同様，やはり上下に引っ張られた長円として描かれることになる。まず，彼らがヨコ軸の上で，「勇気」を必要とするとボルノウがいう第二次集団への参入から退避して，家庭の中に引きこもっているということ自体，「狭い」範囲にいることは明らかである。他方，タテ軸においては親の価値観やみずから設定した「当為」に強迫的にこだわっていたり，プライドが高く進学や将来について高望みをしていたり，自分なりの高い理想や夢想を描いていたり，また同時に，不安や絶望や混沌や衝動や怠惰や無為に「落ち込んで」いたりする。より広い世界への拒否は，多くの場合「身体」を通して表現されている。その狭い家庭内の人間関係の内容は，愛や親しさを求める接近であったり，その否定や拒否，不信，反発，暴力であったりする。家庭の中に引き篭もってはいても，みずからの存在論的な「居場所」の確保の意味での「家への住みつき」には成功していない。それができていれば，この狭い世界にとらわれることなく，より広い範囲の世界に住みつきうるからである。この足許の存在論的根拠となる狭い領域への住みつきが不安定であるため，たとえ高い理想を抱いていても，その実現に向けての展開は実際には困難であり，「自立」は阻止されてしまう。この意味で，高さへの志向は基盤を失した「虚構」のものとならざるをえない。

筆者はこの図式を用いて，直接，登校拒否の生徒と話し合うこともある。単純な十字を書いて「人生が上下，両横の十字方向に行けるとしたら，今，君はどの辺にいる？」というだけで，他にはほとんど何も説明しなくても，大抵はよく理解されうる。すると「理想としてはやっぱり高くにいたいけど，学校に行ってないから実際はこの辺かな」などといって，原点の近くを指し示してくれる。そうなれば，「そうか，上に行きたいんだけど，行けない。何が問題になるんだろう」などと話を膨らませていくことができる。

右に高さへの強迫的なこだわりと述べたが，強迫性はつとに指摘されている登校拒否者の一特徴であった。強迫的ということ，すなわち，完全に「かくあるべし」「～ねばならない」(Sollen) というあり方は，ひたすら狭く，他の可能性に眼を向けることができずに，ただそのことだけに向けて駆り立てられ，上に引っ張られている，ないしは上からの支配に従属させられているということである。そうさせているのは，解体，虚無，死という深淵に引き込まれることへの恐怖なのである。それゆえ，強迫性のひとつの本質は，不均衡な「狭さ」である。この点でも，狭さと虚構の高さに縛られた軌跡として，この登校拒否という「実存的生成の弁証法的流動」の停滞が示されうることになる。

以上をまとめておけば，登校拒否の現存在実現モデルにおける平均像は，「上方にこだわり下方にとらわれた，ヨコの広がりの非常に狭められた範囲で示される軌跡である」ということができる。

こうして登校拒否をわれわれの座標に位置づけることで，従来いわれてきた登校拒否の原因論をこれに関連づけることも可能になる。つまり母親から離れられないで狭い家庭の中にこもるという「分離不安説」も，上方にこだわっている自己像が学校場面で脅かされるために家庭に退避するのだという「自己像脅威説」も，あるいはその他の諸説にしても，登校拒否の以上のようなあり方をそれぞれに切り取った別々の断面であると見なすことができるのである。

さきに「勇気を必要とする第二次集団への参加から退避する」と述べたことに関して，それがいつ起こってくるのかという発症年代の違いにはかなりの幅があるが，ここでこの問題について検討しておくことにしよう。本書では自己性の断絶がもっとも主題となりやすい時期としての中学，高校年代に焦点を当てているが，それ以前，もっとも早くには幼稚園，小学校低学年の段階で起こることもあれば，もっと後で，大学入学後，あるいは大学卒業後に本質的に同様の現象が出てくることもある。

ただ，どの段階における発症にしても，それ以前の――この以前は「歴史的以前」に基礎を置いているけれども，むしろ「存在論的以前」の問題としての――「庇護された空間」における「親しみ」「なじみ」「住みつき」のありようが関連している。これが不十分であるため，新たなより広い世界への住つきに挫折していること

は明らかであろう。サルトルは世界の中の脈絡や意味を欠いた「ものそれ自体」は，グロテスクな嘔吐をもよおす以外の何ものでもないと述べたが，登校拒否児が登校できなくなった時に出会ったものは，おそらくその基礎となる親しさと信頼を欠いた「第二次集団というものそれ自体」，すなわち，さきにヨコの意味内容として羅列した諸々のものうちで，親和的系列のもの以外の対立的，相対的系列に属する，他者，競争，学校，勤勉，責任，規範等々の，剥きだしのものそれ自体，であったのではないだろうか。きっかけが，このような一時的な「信頼」ないしは「自明性」の喪失事態であるということでは，どの段階においても同じと考えられるが，段階により「臨床症状」としての意味や重みは次のように異なってくる。すなわち，幼稚園段階ではまだそれほどこの事態の圧倒は，自我関与的なものではないので，単なる内気な馴染みにくさとしてあらわれるが，親や保母の配慮により集団への参入自体は促進されることになろう。小学校の低学年で登校拒否が起こり，それが何年にもわたる場合には，基本的な第二次集団への移行段階において挫折しているのであるから，これは相当，深刻なものと見なさなければならない。学童期中学年時代での発現は，いわゆるギャング・エイジ期におけるプレイメイツとのかかわりやその少し後でのチャムシップ形成の問題として，そこからの排除や自尊心を損なわせる恥の体験等，仲間との具体的な関係がからんでいるから，そこでの環境調整がうまく行われれば，不登校からの修復は必ずしもそれほど困難ではないと思われるし，思春期から青年期前期，中期での発現では「共通感覚」再構成と主体的自己確立の問題が中核となる。大学入学以降ではじめて出現してくる場合には，様相としては「ストゥデント・アパシィ」のあらわれを取るであろうし，大学卒業以降の場合には，きっかけとしては，同じ第二次集団への直面における自明性の喪失事態であっても，課題はすでに狭く固まってしまっているタテ軸上での自己の再体制化であるので，相当の時間とエネルギーを要する仕事になると思われる。

10. タテとヨコの治療論

以上の検討を行ってきた目的は，このモデル自体は単純であるけれども，その背後にある考え方を提示することによって，これを「治療論的」な（要するに広い意味で教育的，臨床実践的な）具体的なかかわりにとって，その都度の有効な示唆，指針がそこから得られるだけの準拠枠にまで仕上げておきたいとうことに他ならない。さきの登校拒否一般のわれわれの座標上での軌跡ははあくまで平均的なまさしく一般論であって，重要なのはそのことよりもむしろ当の個人個人ひとりひとりの，その都度の動きのほうである。停滞しているとはいえ，その時々の経過の中で現存在はさまざまな志向性を示しうるが，その時々の主題が意味するものを，われわれはこのモデルに位置づけ，平均像に即して読み取ることが可能となる。この点で，さきの「主題内容」の一覧は参考になるであろう。たとえば，冗談めかして「死体をみつけた」とか「祖父の死骸が庭の樹の下に埋められている」などとよくいう女子中学生がいる。それはサディスティックな攻撃性の表現であるよりは，死，屍，虚無のアンチエイドス的深淵に引き込まれる恐怖の表現であろうし，次々に高額な金品の要求をする高校退学の登校拒否生徒については，その母親と次のように話し合うことができる。その要求は親への愛情欲求や居場所づくりや「自分の経験」を積むための費用としては受け入れなければならない。しかし，一定の限度以上は自分でアルバイトをして稼ぐこともできる，すぐにそれができないなら，親との種々の約束，契約とひきかえに渡すのもよい。ただし約束であるからには，本人が守らなければ断固として拒否すべきであるし，守れば渡すべきである。そのどれもがヨコの幅を拡げることになるからである。自宅に閉居してパソコンゲームばかりしているのも悪いことではない。怪物退治と囚われたお姫様救出の英雄譚であったり，智略，軍略を駆使して一国を支配するゲームはまさに世界征服の空想的代理経験だからである。また彼らがよく横になったり，眠ったりするのも，立ち上がって歩むことに疲れきっているからであるが，また自立するためには横にもならねばならない。自分の「居場所」とは「安み，寝るところ」に他ならないからである。こうして，その都度のあり方（すなわち現存在）をこのモデルに位置づけることで，自己実現の方向性に即した心理的意味を推察することが容易になる。

こうしたエピソードをあげれば切りがないが，要するに，停滞し均衡を欠いているのであるから，この停滞から展開するためには均衡を取り戻せるようなはずみをつけさせることが重要となる。とはいえ，ただ欠けているものを与えればよいというほど単純ではない。本人が受け取ろうとしなければ，まったく意味はないからである。虚構の上下へのこだわりとはいえ，それは尊重され，理解され受容されなければならない。このような態度はいつも基本である。そして「庇護された空間」がまず補償される必要がある。その上で，高さへの理想は支えながら，それをより本格的，現実的なものとするために，その時々の主題や位置の意味するものを読み取り，より深く理解することによって具体的な指針が与えられる。実際にその理解や指針を口にするかどうかは，勿

論，別の問題である。上下へのこだわりやとらわれの問題は一応そっとしておきながら，ヨコの広がりへの展開をどうはかるかがさしあたっての課題となる。経験の幅を拡げることが自立を可能にするからである。したがって，治療論的方向づけとしては，徹底的な「相対主義」が重要となる。学校へ行けないことも悪いことではない。だからといって，「現代という異常状況において，学校に行っているほうが異常なのだ」と主張するのでもない。そうなれば，それ自体がもう絶対主義になるからである。「登校することも大事である。できればそうしながら，自分さがしもしていこう」というのが，ここでの相対主義であり，さきにわれわれの空間モデルにおけるどの方向も重要だと述べた視点に繋がるのである。

治療「関係」ということ自体，これはヨコ方向にある。そもそも自己の確認はタテだけではできない。つねにヨコを必要とするのである。つまり同じ地平に立って，他とは違うものとして自己が知られうる。早い話が，自分を確認するためには鏡を見ればよい。映っているのは自分と同じものである。しかし，それ自体が自分ではない。それではないものとしての自分が確認されるのである。精神発達論におけるワロンやメルロー＝ポンティやラカンによる「鏡像段階」の主題とか，コフートによる「鏡転移」「双子（分身）転移」という問題は，この心理過程と深く関連しているが，ここで重要なのは，要するに，自分がそれとは「違う」ものとして自己奪取するためには，前提としてまず「同じ」という基礎がなければならないということである。「同じ」ということは「交替可能であるということ」であるが，さきにヨコは前後，左右が交替可能であった。ここで鏡像は左右，前後が逆になるが，上下はならないというのは興味深いところである。上下，すなわち自己の軸においては，交替可能性はない。むしろヨコの交替可能性の否定として自己が確認されるのである。治療関係というヨコの関係においては，治療者は相手が理解され受容され同型的と感じられるような場をまず設定しなければならない。そこでは「共通の感覚」「共にあること」「もまたあること」の経験が重要である。その共有された経験を共に拡げていくことがまず治療者の努めねばならないことである。そこから違うものとして自己を奪取して確立するのは相手自身がなすべきことである。そのことはもはや交替可能ではない。とはいえ，その自己奪取がよりやり易く，より適切なものとさせるための調整は不可欠である。その都度の自己奪取は保障され受容されなければならない。その上で，われわれのいうアンチテーゼが相手の受けとめられうる範囲で，投げかけられる必要がある。それによって，自己確立への弁証法的展開を再び流動的なものとなしうるからである。

以上の原則は，さまざまに多様であるすべての実践の場において，当てはめることができる。本人の遊戯であれ面接であれ，親の面接であれ，収容施設であれ学級体験の場であれ，グループであれキャンプであれ，同じことである。とくに「ヨコの広がりをめざして」というわれわれの治療仮説から直接に導かれた実践として，われわれは最近，「ヨコ体験合宿」と名づけられた接近に積極的に取り組んでいるが，こうした試みを実施してみていつも感心させられるのは，登校拒否生徒と同数の割合で参加してもらっているボランティアの大学生や院生たちが，ここでのオリエンテーションに即した方向で示す優れた動きである。それは理論的，反省的に獲得されたものであるよりは，はるかに直感的，共通感覚的に感じ取られ，思わずたくまずして発揮された対応に違いない。しかし，それゆえにこそ，こうした資源は非常に貴重である。同じことは，最近の「メンタル・フレンド」についてもいいうる。われわれはこうした登校拒否生徒を取り巻く治療的資源の組織化の意味でも，今後一層，ヨコの広がりをめざしていくことが重要な課題となろう。

ここ何年かの各方面における治療的接近のあり方には従来とまったく様相を異にしたものがある。それはさきのような合宿をはじめとする集団療法，生活療法的接近であったり，臨床的家庭教師であったり，種々の塾や各種学校での動きであったり，あるいは「学校づくり」であったり，地域での取り組みであったり，要するに，草の根運動的に受け皿の裾野がぐんと広がっているのである。いわば登校拒否治療論の「相談室モデルからコミュニティ・モデルへ」という転換の流れは，今や大きな潮流のうねりとして音を立てて進行しているかのようである。そしてこのうねりの基調旋律こそ，「ヨコの広がりをめざして」という方向づけとしてまとめうるものなのである。これは大変望ましい動向である。しかし同時にまた，それらの対応が登校拒否への十分な理解と慎重な治療論的配慮を欠くような場合には，例のヨット・スクール事件やそれに類する教育や治療の隠れ蓑をまとった犯罪に堕する危険性をも蔵していることには留意しておかなければならない。

文　　献

Binswanger, L. 1949 Vom anthropologischen Sinn der Verstiegenheit. (Erschienen in) *Nervenarzt* **20**. 8. (Wiederabdruck) Straus, E. • Zutt, J. (Hg) 1963 *Die Wahnwelten.* (*Endogene Psychosen*) Akademische Verlagsgesellschaft, Frankfurt.

Blankenburg, W. 1971 *Der Verlust der natürlichen Selbstverständlichkeit. Ein Beitrag zur psychopathologie symptomarmer Schzophrenien.* Ferdinand Enke Verlag, Stuttgart. (木村敏他訳 1978 自明性の喪失 分裂病の現象学 みすず書房)

Blankenburg, W. 1972 Grundsätzliches zur Konzeption einer "Anthropologischen Proportion." *Zeitschrift für Klinische Psychologie und Psychotherapie* **20**. Heft 4, 322-333.

Bollnow, O. F. 1969 *Anthropologische Pädagogik.* (浜田正秀訳 1969 人間学的に見た教育学 玉川大学出版部)

Erikson, E. H. 1959 *Psychological Issues. Identity and Life Cycle.* International Universities Press, Inc., New York. (小此木啓吾訳 1973 自我同一性 アイデンティティとライフ・サイクル 誠信書房)

Heidegger, M. 1926 *Sein und Zeit.* (11Aufl. 1967) Max-Niemeyer Verlag, Tübingen.

池田博和 1977 分裂病における「還帰」の人間学的意味方向 村上英治，渡辺雄三，池田博和ほか著 ロールシャッハの現象学 ―分裂病者の世界― 第9章 東京大学出版会

池田博和，桐山雅子，平石賢二ほか 1988 登校拒否に関する研究 第Ⅱ報 ―「タテ関係からヨコ関係への発達における挫折」としての登校拒否― 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）35, 163-178

池田豊應 1993 登校拒否論から見た現代の精神的状況―タテとヨコの社会学― 中等教育研究（名古屋大学教育学部）第4号，141-149

池田豊應編著 近刊 青年期登校拒否 ―ヨコへの広がりを目指して―

木村 敏 1986 危機とは何か 青年心理 **60**. 2-10 金子書房

Koch, C. 1952 *The tree test. The tree-drawing test as an aid in psychodiagnosis.* Verlag Hans Huber, Bern. (林勝三他訳 1970 バウム・テスト 樹木画による人格診断法 日本文化科学社)

Kuhn, R. 1972 Die Aktuelle Bedeutung des Werkes von Ludwig Binswanger. *Zeitschrift für Klinische Psychologie und Psychotherapie* **20**. Heft 4, 311-321.

村瀬孝雄 1983 思春期の諸相 飯田真他編 岩波講座・精神の科学6 ライフサイクル 第五章 岩波書店

(1993年9月7日 受稿)

ABSTRACT

SPATIAL STRUCTURE OF "DA-BEING REALIZATION" IN THE ADOLESCENT CRISIS — THE PHENOMENOLOGICAL INVESTIGATION —

Hoh-ou IKEDA

We have discussed the central problem of the school refusal is in disproportion of vertical relationship with adults and horizontal relationship with friends. These directions mean essentially different characteristics of human development; while the vertical direction is axis of self, that is, going up means self-realization or individuation, and going down means self-renunciation or self-dissolution, the horizontal direction is axis of world, that is, going sideways means world-realization or socialization. "Da-being realization" consists of these two moments that can refer simbolically to very diverse matters.

The balance of these two moments is lost in the adlecent crisis. The vertical direction being emphasized, the horizontal direction is sacrificed in them. This disproportion is the state that Binswanger called "Verstiegenheit."

Thus the investigation of spatial structure suggests therapeutic orientation to support the adlescent crisis. It is important to get them to extend latitude, to walk on the earth, to experience on the horizontal axis, leaving matters on the vertical axis as it is.